書籍を模擬する遊び

――「見立絵本」にかんする疑問、から

小林ふみ子

はじめに―「見立絵本」をめぐる諸問題
一　書物の定型で遊ぶ作品の濫觴
二　宝暦以後、同時代の展開―絵本も絵本以外も
三　書物形態模擬の方法にみる十八世紀後半の特質
おわりに

「見立絵本」と呼ばれてきた作品群には、近年、議論が進められてきた「見立て」の語義に即して、特定の主題に該当するものを別の事物で視覚的に仮構し、関連する語彙で説明をつけたものを集めた作だけでなく、既存の書物の形態に筋違いの内容を盛りこんで遊ぶ作品群が含まれる。後者の方法は、実は近世初期以来の類例を指摘でき、絵本とは呼び得ない作における書籍模擬の作品群との連続性も無視できない。なにより「見立て」ならぬ「やつし」として区別されてよい。

いっぽうそれら書籍模擬の作品群こそ、広く共有された知の形式を土台とした戯れとして近世文芸の性格の一つをよく表すものといえ、それが近世中期に多様に花開いたことがこの時代の特徴をよく表している。

はじめに―「見立絵本」をめぐる諸問題

本稿は、「見立絵本」と呼ばれる作品群に包括されている複数の要素を腑分けすることを通じて、十八世紀後半の作品を特徴づけるものについて考察するものである。

「見立絵本」とは、中野三敏「見立絵本の系譜」によって一群の作品として認定され[1]、今や近世文学史に位置づけられているとまではいえないものの、中期の文芸の一隅を占めることが知られる作品群である。同論文では典型となる『絵本見立百化鳥』（宝暦五・一七五五年刊）の作者を江戸座の俳諧師雨夜庵亀成と特定、その後に展開した、視覚的なこじつけを趣向とする絵本群を系譜として提示した。その前史として、上方で遊戯・雑芸の伝授や解説といった実用性を帯びた絵本が行われていたことを指摘しつつ、『絵本見立百化鳥』がいわば規範となって、そこからおもに江戸で文芸として発達したことを描出する。提示された天保末までの三十五点には、それぞれ事物の見立て、書物の見立て、文字絵、滑稽開帳、滑稽意匠、絵合せ、身振り・物真似などといった解説が付けられる。そこに視覚的な模擬という意味での見立てという共通性はうかがえるものの、明確な定義は与えられていない。

この雑駁さが「見立」という語の曖昧さを増幅してしまうとして分類を試みたのが、岩田秀行「機知の文学」であった[2]。論文「「見立絵」に関する疑問」以後、一連の論考によって「見立」「見立絵」の語義を正確に捉えようという動きを作ったことで知られる同氏は[3]、同じ問題意識からこれらの絵本群について、総称から「見立」を外して「滑稽絵本」としたうえで、1見立尽し形式　2物合せ形式　3表現模倣形式に分類する。1は『絵本見立百化鳥』に代表される、花鳥から仙人や化物まで特定のテーマに即して、別の事物によって形態を似せた図像を集めたものとする。2は、例えば『抛入狂花園』（明和七・一七七〇年刊）など事物を生け花の形式に擬えた作、また宝物に擬えたものを実際に持ち寄った『たから合の記』（安永二・一七七四年または翌年刊）など、いわゆる「物合せ」が実現可能となる類をいうとする。3は次節で詳述する、よく流布した本の書型や内容の表現形態を模倣した形式の本である。

これは炯眼であった。『絵本見立百化鳥』が狩野派の花鳥絵手本『画図百花鳥』（享保十四・一七二九年刊）の体裁をとって、1であると同時に3でもあったために、その違いが曖昧に捉えられてきたが、この三つには表現法として重なり合わない部分があるからである。たとえば、1のうちでも事物を仙人に擬えた鶴歩道人名の『風流准仙人』（宝暦十年刊）は[4]、和刻もされて普及した明版の仙人

図解『（有象）列仙全伝』のような仙人絵本を模擬したものといえる。しかし、「延喜式神名帳」の名を取って神像見立てとした『風俗神名帳』（同七年刊）[5]の元となる絵本が存在するであろうか。さらにさまざまな事物の切断面図を集めた『新撰小口合』（同六年刊）となると、原型となる書物があるとは考えがたい。2については生け花や宝物の図解本はままあって3でもあるとしても、1には3でないものもあるということである。逆に3は、次節で述べるように「絵本」か否かを問わず、これ以前からある、既存の書物の形式の利用を趣向とした作品との共通性が大きい。つまり、1・2と3は別の次元にある条件で、両者にあてはまる作もあれば、片方のみの作もあること、従来「見立絵本」と呼ばれてきたのは、数学用語でいうならこの和集合であることがわかる（1と2は実現ないし再現性の有無だけが問題になり、重複しない）。

岩田論文によるこの指摘にもかかわらず、その後も「見立絵本」の呼称が定着をみている。[6]また筆者もかかわって『江戸見立本の研究』と題する共著の注釈集を出したことがある。[7]これは「見立絵本」を念頭に、しかし挿絵の比重の小ささから「絵本」とは呼びがたい作品の注釈が含まれていたゆえの苦心の命名であった。収録した四作品は万象亭編『絵本見立仮譬尽』（天明三・一七八三年刊）のような上記1かつ3である作、および3にのみ該当する作品、すなわち算術書『塵劫記』の形式に芸者風俗を盛り込んだ『甚孝記』（安永九年刊）、小謡本の形式に遊里の諸事情を載せた岸田杜芳作『通流小謡万八百番』（天明四年刊）、百人一首の注釈を装ってこじつけ解釈を載せた山東京伝『初衣抄』（天明七年刊）。これらを「見立本」と総称してしまっていた。

しかし、自省もこめて書くが、完全には重ならない異なる要素をもつ作品群からなる「見立絵本」を問い直すことなく、放置していてよいはずがない。以下、岩田論文の分類をふまえてこの問題をどう捉えるべきか考えてみたい。

一　書物の定型で遊ぶ作品の濫觴

上述の3、つまり既存の書物の書型や版面を模擬する戯作については、岩田論文ですでに絵本以外で上方の初期洒落本に先蹤があることが指摘されている。たとえば人見必大による本草書『本朝食鑑』（元禄十・一六九七年刊）による『本朝色鑑』は宝暦初年頃の刊とされ、[8]漢籍の医書『本草備要』の形式で娼妓を位、種類ごとに漢文で論じた『本草妓要』は序文から宝暦四年頃の刊と考えられている。[9]さらにわずかに早い江戸の例として、異国情報を載せて普及した西川如見『華夷通商考』（宝永五・一七〇八年

刊）の形式に載せて、吉原や品川の遊里を異国のように紹介した『華里通商考』には数種の刊本があり、早いものでは延享五（一七四八）年の序文を冠した本が知られる。[10]

とはいえ、こういう広く普及した書物の形式を利用して遊ぶのは、実は近世初期から例がある。とりわけ早くに『伊勢物語』を逐語的にもじった『仁勢物語』（寛永・一六二四―四四年間刊）があり、『伊勢物語』版本のうち寛永六年版本の挿絵や造本を模して作られたものであったことがかねて論じられている。[11]

また絵入りという条件を外せば、江戸で活躍した貞門俳人、未得による狂歌集『吾吟我集』（慶安二・一六四九年序、刊）大本二冊もあった。音でいえば『古今和歌集』に濁点を付しただけの簡潔にしておかしみ溢れる命名が光る本書、「やま田歌は人のとるさなへをたねとして……ちからをもいれずしてあひ槌をうごかし」などとかの仮名序をもじる序文を備え、勅撰集の部立てにならって四季・賀など全十巻を並べる（なかには世話などという近世らしい部立てもあるが）。大本二冊という形態、匡郭のない歌書らしい版面は、当時確実に出版されていたといえるおそらくほぼ唯一の『古今和歌集』版本たる、正保四（一六四七）年版『二十一代集』所収本[12]と同じ、半丁十行の体裁をとる。本書のおかしみは長らく愛され、宝暦七年に江戸で『狂歌集要』の名で再刻されてのち、書名を復し、明和・安永・寛政などの刊記を付してくり返し摺り出される人気作となった。[13]この勅撰集模擬の趣向は、同じく『古今集』仮名序をもじった序文を冠し、それまでの狂歌の集大成を狙った京都の生白堂行風編『古今夷曲集』（寛文六・一六六六年刊）、『後撰夷曲集』（同十二年刊）、『銀葉夷歌集』（延宝七・一六七九年）にも引きつがれていく。

また信多純一「にせ物語絵」は、『伊勢物語』版本挿絵の変奏の流れのなかで元禄から宝永・正徳期の「やつし」の文化に言及している。[14]例示されるうち、「やつし謡」と総称される『乱曲扇拍子』『乱曲組盃』（ともに宝永四年刊）、『乱曲颯々颯箱』（同七年刊）は、いずれも当時広く行われた謡曲を酒席用にもじって戯れた作を集めたもので、小謡本にもあるような懐中用の横小本で出されている。[15]これらもことばのもじりだけでなく書型そのものまで模擬する早い例に数えられよう。同じくやつし文化の所産として挙げられる例のうちに、作者不明の浮世草子『けいせい請状』（元禄十四年刊）がある。横本三冊を役者評判記に擬えて京・江戸・大坂の巻とし、各巻頭に「近松門左衛門作けいせい請状目録」と冠してそれぞれ近松作『百日曾我』（同十年、大坂竹本座初演）はじめとする三都の「傾城請状」浄瑠璃を巻頭にすえる。これも体裁によって劇書

らしさを演出した例といえよう。[16]

その少し前には吉田半兵衛画『好色訓蒙図彙』（貞享三・一六八六年刊）が出されていた。『訓蒙図彙集成』にも収められ[17]、多種展開された『訓蒙図彙』の一種という捉え方もあるが、各種の器財類の名称を知るための実用書として必要性があるかといえばあやしい。好色風俗の図解本とする解題も多いが、説明文は戯文的で、慰み草的要素の方が濃いとする『日本古典文学大事典』の杉本好伸評が妥当ではないか。[18]似た趣向の『好色重宝記』（元禄九年頃刊）や、上方の色茶屋案内の『茶屋諸分調方記』（元禄六年原刊、同十一年増補刊）も同様であろう。[19]

以上のように、先行する書物の形式に、あきらかに似つかわしくない内容を盛り込む戯れが、素朴なかたちながらも、すでに元禄・宝永の頃には行われはじめていた。

二　宝暦以後、同時代の展開―絵本も絵本以外も

このような既存の書物の形態を模擬する遊びが、十八世紀なかばの初期洒落本では上方でも江戸でもさかんに行われていたことは先述した。それらも挿絵の分量からして絵本とはいいがたいものだが、同様に文字を中心に役者評判記のかたちをとってさまざまな人や事物を論評した、いわゆる名物評判記類がさかんに刊行され始めるのもこの時期のことであった。この種の出版物を集成して一ジャンルとしての輪郭を与えた中野三敏『江戸名物評判記案内』によれば、嚆矢は談義本の諸作品を論じた江戸版の『千石篩』（宝暦四年刊）で[20]、その後、三都を中心に学者・文人から名物まで対象も幅広くさまざまな作が出されている。

医書の形態や記述の様式を模した作品が数々出されていることは、近年、福田安典『医学書のなかの「文学」』に多々紹介され、分析された。[21]とりわけ版面をよく模擬しているのは、万治より版を重ねた曲直瀬道三『衆方規矩』に書名から横本の体裁や版面まで似せた藪内竹斎『教訓衆方規矩』（宝暦十二年刊）らしく、これをはじめ、洒落本も含めた諸作品がいかに医書を擬態したかが論じられている。

芝居の世界でもこの遊びが大いに行われたことは、浜田啓介「滑稽本としての劇書」にまとめられている。[22]『武鑑』の形式をとった『明和伎鑑』（明和六年刊）、『俳諧觸』（同五年刊行開始）の体裁の『役者今文字摺』（同八年刊）以下、馬琴の『戯子名所図会』（寛政十二・一八〇〇年刊）[23]や三馬『戯場訓蒙図彙』（享和三・一八〇三年刊）[24]に至るまで、大雑書や吉原細見、節用集など幅広い書物を元にした劇書が出されていくさまを描出する。

陳奮漢こと若き日の大田南畝による『寝惚先生文集初編』（明和四年刊）の出版を契機として次々と出版された

狂詩集も、絵本ではないが先行する書籍の形態に依拠して戯れる作品群である。これに先だって大坂で出された桂井蒼八『古文鉄砲前後集』（宝暦十一年刊）にも触れておくべきか。『古文真宝』前集・後集の詩文のもじりで、漢文体だけでなく和文体の狂文も含み、巻の構成がないので、先蹤と呼ぶには微妙なところ。[25] それに対して『寝惚先生文集』は、荻生徂徠や服部南郭ら当時権威を誇った古文辞格調派の詩人たちの詩文集の体裁を徹底的にやつしたことがあきらかにされている。それが世人の喝采を浴びたことは後印本の種類の多さが物語る。「～先生文集」の命名、見返しや序跋・目録・刊記の体裁、あえてわざわざ初編と銘うったところまで、細部にわたって戯れ尽くしていた。[26] 大先生方の詩文集は立派な大本ながら、洒落本や『柳多留』（明和二年～）などと同じく小本で出したのはあえて愛敬をみせたところであろう。

この刺激のもとに出された闇雲先生を名のる人の『娯息斎詩文集』（同七年刊）もこれにならってふざけ倒したことによって、やはり多くの伝本が今に残る当たり作となった。[27] その後、やはり江戸版と考えられている都而万棄物臭香『掃溜先生詩集』（同八年刊）、京都版かと推測される虚口出方第滅多『片低先生詩集』（同八年刊）、樗々羅坊『図惚先生詩集』（安永五年刊）と、後続作が相次ぐ。[28]

この延長上に、再び南畝が世に出したのが、流行の『唐詩選』やその注釈書である千葉芸閣『唐詩選掌故』（明和五年刊）の名をもじり、狂詩集らしく中本に抑えながらもかたちを模擬した『通詩選笑知』（天明三年刊）以下『通詩選』三部作であり、[29] また（『吾吟我集』同様に）勅撰集の部立てを踏襲して半紙本二冊で出した狂歌集『万載狂歌集』（同年刊）などであったこともよく知られている。また志水燕十が、これも中本ながら『伊勢物語』の二段組注釈書のていで世俗の諸事情をうがって遊んだ『似勢物語通補抄』（同四年）を出し、京伝の注釈書体裁の百一人首枉解物『初衣抄』の先蹤となる。[30] つまり「絵本」とは呼べない、文字を主とする作品でも、衆人の知る書物の形態に倣った遊びは同様に行われた。ここに絵本であるか否かで線引きする必要があろうか。

絵入本でも黄表紙は、かの中野三敏「見立絵本の系譜」において「その殆どがいわば見立絵本」であることを理由として、一覧から除外されていた。やはりこの時期、安永四年の恋川春町の遊びに始まった黄表紙が、もともと子ども向けの草双紙―黒本青本のあどけない形式を戯作化したものであったことをいうのであろう。[31] これもまたジャンルそのものが既存の書籍の形態模倣の戯れであった。

先行する書物を模して遊ぶ作品群にはもう一つ、挿絵が

図1　画工不明『閨暦大雑書玉門大成』
大本一冊　メトロポリタン美術館蔵

重要な要素でありながら「見立絵本」から除外されてきた一大ジャンルがある。艶本の類である。とりわけ宝暦以降、実用書の形式を用いてさかんに春本を刊行したのが上方の浮世絵師月岡雪鼎であった[32]。春本の常としていずれも刊年不明ながら明和・安永頃刊の刊と推定されるもので、『女大学宝箱』（享保元・一七一六年刊）を模した『女大楽宝開』[33]、自ら描いた『女庭訓御所文庫』（明和四年刊）による『女貞訓下所文庫』、『女今川おしへ文』（同五年刊）を用いた『女令川おしへ文』、『医道日用重宝記』（元禄五・一六九二年刊）に基づく『艶道日夜女宝記』、『婚礼罌粟袋』（寛延三・一七五〇年刊）にならった『婚礼秘事袋』と、宝暦・明和にかけて同様の趣向で数々出版している。雪鼎以外にも『閨暦大雑書玉門大成』（刊年・画工不明）がある[34]【図1】。書名からして『永暦大雑書天文大成』（安永二年刊）あたりに倣ったらしい堂々の大本一冊で、北尾重政風の画風ながら内容からこの頃の大坂の刊らしい。

江戸でも和歌にのせて食物の効能をうたった古典的啓蒙書『食物和歌本草』（寛文七・一六六七年刊）のいろは順の構成で、女性たちを年齢や職分などで分類して論じる態度で遊んだ磯田湖龍斎の春本『色物馬鹿本草』（安永七・一七七八年頃刊）がある[35]。また描かれる女性の髪型などから明和末から安永なかば頃の刊と考えられる作者・画工不

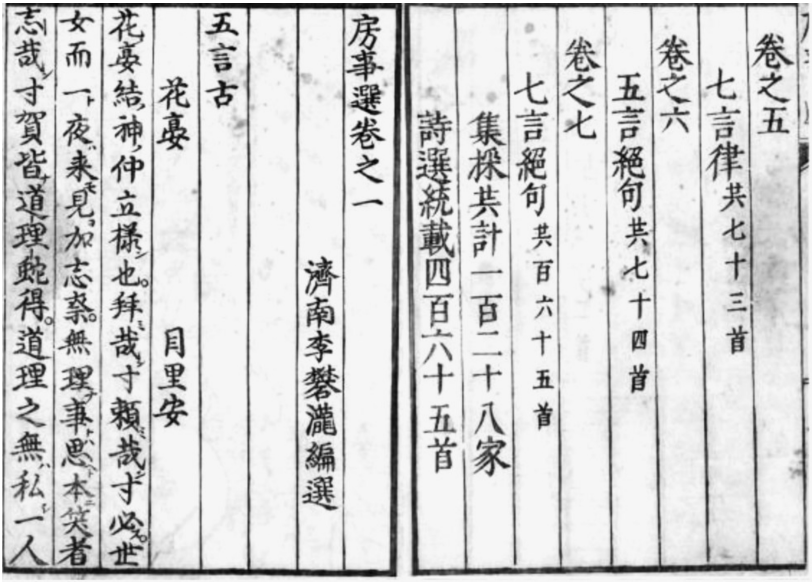
巻之五
七言律 共七十三首
巻之六
五言絶句 共七十四首
巻之七
七言絶句 共百六十五首
集採共計一百二十八家
詩選統載四百六十五首
房事選巻之一
濟南李礬瀧編選
五言古
花妓　目里安
花妓結神仲立様也拜哉寸頼哉寸必世
女而一夜来見加志桑無理事思本笑者
志哉寸賀皆道理蛇得道理之無私一人

図 2　画工不明『房事選』小本一冊　筆者架蔵

詳の春本『房事選』は、『通詩選』に先だって、序文・目録・巻頭詩までは（以下は絵本だが）『唐詩選』を模擬して遊ぶ作であった【図2】[36]。

同類の下がかった作で文字のみの、悟道軒こと平賀源内の『長枕褥合戦』（明和四年刊）も読本浄瑠璃というよりは浄瑠璃書体で遊んだ戯作といえようし[37]、同じ浄瑠璃書体を生かした作品としては（春本ではなくただの尾籠な作品だが）島田金谷こと腹唐秋人、すなわち中井董堂『幸大寺不実録』（天明七年刊）なども挙げられよう。

以上、形態を衆人の知る書物の体裁に擬え、そこに似つかわしくない内容を盛り込んで戯れる作品群について、宝暦よりも前の時代の例をたどった前項に続き、宝暦から寛政頃までの例を、江戸・上方を問わず眺めてきた[38]。これらには完全に版面まで模倣し倒したものもあれば、巻の構成、あるいは巻頭など部分的に形式をとってそれらしさを演出したものなど、模擬の程度には幅があるが、格式や権威のある既存の書物の形式を転用するのを趣向にしているところは共通している。

「はじめに」でみたように、この方法は従来、「見立絵本」の十分条件の一つとされてきた。たしかにこれらを既存の書物に「見立て」ているということは可能かもしれない。しかし、既存の書物という権威ないし一般的認知のあ

る枠組みを基盤として、そこにふさわしくない内容を盛り込んで遊ぶその方法は、卑俗化・当世化、つまり「やつし」である。この「やつし」という操作は、まったく関係のないもの同士を連想関係で結びつけて遊ぶ「見立て」と近代になって混同されてきたが実は異なる内実をもつこと、この両者を区別することの重要性が、江戸の文芸や絵画の研究において説かれてきた。[39] これを「見立絵本」と呼び続けるのは、ここまで進展してきた「見立て」「やつし」の区別の動きに逆行することになるのではないか。

三　書物形態模擬の方法にみる十八世紀後半の特質

前項までの検討で、先行する書籍の形式を模倣した遊びは、中期に限らず、仮名草子時代以来、上方でも江戸でも近世において幅広く行われた表現の方法であったことが確認できた。つまり、旧来「見立絵本」にくくられてきた三つの表現法のうち、その部分は戯作時代の江戸に特有の方法や感覚ではなかったことになる。

そうなると、残りの、純粋に「見立て」による視覚的表現の部分、つまり木や鳥、貝や宝物や妖怪のような所定の主題にあてはまるものを、読者の共通理解のもとにある知識や情報によって彩るなどの工夫を凝らして身近な物品で構成する、ときにそれを実演する、そうした営みにのみこの時期に特有の作風が認められることになるのだろうか。冒頭に掲げた中野・岩田両論文によって江戸座俳諧の延長上にあることが論じられたこの手法は、たしかにこの時代の江戸の都市文化に色濃く漂う遊びの気分を反映している。

ただおそらく、特徴的なのはそこだけではない。再び岩田論文の分類を用いていうならば、純粋にその1・2の要素が核となって成立している作品はさほど多くない。『百化鳥』同様の純粋な「見立て」、当時流行の生花の見立て、そして「宝合」の類くらいか。むしろ3の表現模倣形式との混合、また前節でみたように文字が中心の作も含めて考えれば3だけで成り立つものの方が多いのではないか。

ではその3の方式で（1・2を兼ねるものも含めて）、衆人になじみのある書籍の形式を用いて遊ぶといったときに、この時代の作品にのみ指摘できることはないのだろうか。そこで模擬され、ちゃかされたりした対象、その方法にはどんな特質があるのか。

一ついえるのは、近世初期、前期のこうした遊びが『伊勢物語』や『古今和歌集』といった古典文学そのもの、または『訓蒙図彙』『重宝記』、あるいは謡本といった日用の書物などの比較的限られた対象をやつすものであったのに対して、数が増えるにつれてその対象が多様化したことである。実用書でも『塵劫記』や『大雑書』などに広がりを

みせ、衆人に親しみのあるという点で劇書の形式も用いられた。役者評判記を模した名物評判記のほか、『役者身振氷面鏡』（明和八年刊）に擬えた京伝『客衆肝照子』（天明六年刊）も挙げられる。小紋の意匠集の体裁で、さらに不揃いの端布を並べる点では古渡りの名物裂帖の形態を模したと推測され[40]、また舶来の更紗の意匠集『増補華布便覧』（安永十年刊）もさかんな利用が指摘され、念頭にあったと考えられる京伝『小紋裁』（天明四年刊）以下一連の小紋物も[41]、そうした対象の広がりの例に数えられよう。

標的とされる書物が多様化するなか、内容との落差を広げるべく、より堅く学術書の体裁をとるものが増えたことは顕著な傾向として指摘できる。蘭学をふまえた地理書の体裁を遊里にあてはめた『華里通商考』をはじめ、より学芸性の高い書物が対象になった。たとえばさきに触れた『本草妓要』は、『本草備要』のほか当時の著名な医者香川修庵の『一本堂薬選』（享保十四〜十九年刊）などをもじり、体裁を模したことが指摘されている[42]。万象亭編『絵本見立仮譬尽』は、見開き右半丁の解説文は本草書、とくに貝に特化した大枝流芳『貝尽浦の錦』（寛延四年刊）のような書籍を念頭に、図と狂歌からなる左半丁は『新撰三十六貝和歌』（元禄三年刊）その他、貝に古歌を取りあわせた貝歌仙の絵本に拠る[43]。古典文学のもじりは、『通詩選笑知』などのようにひと手間かけて注釈書の体裁を採る。

これら、また『華里通商考』のように、ちゃかしの標的が近い時代の学問的著作になることも注目される。蘐園派の詩文集を模した南畝らの狂詩集がその代表格である。徂徠の辞書『訳文筌蹄』（正徳四-五・一七一四-一五年刊）を模した朱楽菅江の洒落本『雑文穿袋』（安永八年刊）は似山先生なる人物が奴の此蔵相手に遊興を語るという筋立てをとるために原書の体裁模擬という点では徹底していないが、会話中に解説するていで遊里風俗に関連する唐話の語彙を列挙し、辞書らしい版面を演出している。京伝が吉原事情を図解した『新造図彙』（天明九・一七八九年刊）は、たんに『訓蒙図彙』の体裁をとるだけでなく、平住専庵『唐土訓蒙図彙』（享保四・一七一九年刊）の部立てや項目を取り入れていることが指摘されている[44]。

以上のようにたしかに十八世紀後半には江戸でも上方でも、よく知られた書物の形式を模擬してそこに鄙俗な内容を盛り込む遊びが盛んに行われ、その対象となる書物も学術の香り漂うものまで含め、多彩なものとなった。その背景としてはもちろん出版業の発達にともなう出版物全体の多様化、諸学芸の発展があろう。ただ、そのうえで、この時代の作者たちが発想や手際を競いあうように凝った遊びを展開したという面があることはまちがいない。

おわりに

本稿では、「見立絵本」と総称されてきた滑稽絵本には、いわゆる「見立」の操作によって仮構された図像を集めて絵本化した作品のほかに、広く知られた書物の定型をとりながらもそれにふさわしくない内容を盛り込んでふざけた作品が含まれ、両者には重ならない部分があることを確認した。そのうえで後者は絵本以外でも近世初期より行われてきた手法で、「見立」というよりは「やつし」であることを論じた。その点を重視するならば「見立絵本」というときは前者に該当するものに限定し、たとえば中野論文の一覧のなかでも京伝の『新造図彙』のような作品は除外するほうが混乱がないのかもしれない（京伝は同書序で『百化鳥』に言及しているが、あくまで作中の「画図」の模擬についてのことである）。

またそれとは別のこととして、近世初期より例のみられる既存の書籍に擬態する遊びが十八世紀後半に江戸・上方の双方で大きく発展し、その対象となる書籍が多様化したこと、とりわけ学術的な色彩の濃い著作が選ばれるようになってこの時代ならではの表現を生み出してきたことを述べてきた。それは十八世紀の諸学芸と出版の開花を考えれば、いわば当然の動向というだけのことかもしれない。

ただ、それが寛政期を境にごく少なくなってゆくこと、またその限られた作品が、実用書などすでに模擬の先例のある書物を選び、焼き直しといわざるを得ないものとなっていることが、盛時の輝きを照射する。これ以降の時代の作品については所与の課題を逸脱するために略述にとどめるが、滑稽本としても書簡文例集の体裁をとった十返舎一九『諸用附会案文』（享和四・一八〇四年刊）、それをも含めて先行するこの種の本の趣向のさわりを集大成した三馬『小野篁蘆字尽』（文化三・一八〇六年刊）以後、めだって工夫のある作品は見あたらなくなる。馬琴が読本浄瑠璃の体裁で化物たちを活躍させた『化競丑満鐘』もこの種の遊びと理解されるが、これもその直前、寛政十二年の刊行であった[45]。浜田前掲稿が「『戯場訓蒙図彙』以後は、劇書は文学様式史上に、加うべき意義を持たないものの如くである」と断ずるが[46]、それは劇書以外も同じく。書籍の形態模擬の方法をとる作品そのものが少なくなり、新たな趣向に乏しくなったということではなかろうか。この種の趣向が文化・文政期以降にもっとも多く見られる狂歌本でも、肖像入り『百人一首』に擬えた天明期以来の画像集、役者評判記や吉原細見、『小野篁歌字尽』や『節用集』などの実用書に擬えた作はまま出されているが[47]、とりたてて目新しい展開はみられない。

誰もが知る書籍の形態を利用した遊戯的作品が宝暦から天明・寛政にかけて江戸で質量ともに頂点を極めたことは、この時代の雰囲気をよく物語る。とはいえ、そうした戯れはそれ以前から、また上方でも行われてきたことであった。これは、今日のように際限なく対象が拡散することのなく、一定の範囲で共有された知を基盤とした遊戯的精神の発露としての近世文学全体の特徴を示す、一つの流れといえるのではなかろうか。また、この一連の作品群からは、当時の日本の文芸において、挿絵だけでなく書型や版面の形態、字体も含めた視覚性がどれほど大きな要素であったかがよくわかる。近世文芸のこうした特質を体現する作品群がそれ以前からの流れを承けてもっとも大きく開花したのが、この時代であった。

注

(1) 中野三敏「見立絵本の系譜―百化鳥の余波―」(『戯作研究』中央公論社、一九八一年、初出一九七二年)。

(2) 岩田秀行「機知の文学」(『岩波講座日本文学史9　十八世紀の文学』岩波書店、一九九六年)。同氏の「戯作の二重構造と江戸文化」(『日本の近世12　文学と美術の成熟』中央公論社、一九九三年)もまた「古典をもじる形式の戯作」の節を設けて論じている。

(3) 岩田秀行「「見立絵」に関する疑問」(『江戸文学研究』新典社、一九九三年)ほか。

(4) 濱田義一郎編『天明文学』(東京堂出版、一九七九年)所収中野三敏影印・翻刻・解題。

(5) 『太平余興』二号(二〇一八年)に太平主人影印・翻刻・解題。なお『風流准仙人』の先蹤として紹介する木越俊介「教養の桃源郷―見立絵本『風流准仙人』」(鈴木健一編『浸透する教養』勉誠出版、二〇一三年)がある。

(6) 近年のものでは、佐藤至子『山東京伝　滑稽洒落第一の作者』(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)、高橋則子「見立絵本『(道化生花)』について」(『近世風俗文化学の形成』国文学研究資料館、二〇一二年)、木越俊介「教養の桃源郷」(注5)、黒沢愛子「『滑稽絵姿合』考」(『学習院大学人文科学論集』二二号、二〇一三年)、鈴木奈生「天保末期の「絵兄弟」:『滑稽絵姿合』小考」(『語文論叢』二九号、二〇一四年)など。

(7) 小林ふみ子・鹿倉秀典・延広真治・広部俊也・松田高行・和田博通・山本陽史『江戸見立本の研究』(汲古書院、二〇〇六年)。

(8) 古典文庫『初期洒落本集』中村幸彦解説(一九五八年)。『洒落本大成』三巻(中央公論社、一九七九年)中野三敏解説もこれを踏襲する。福田安典『医学書のなかの「文学」』1章3節(笠間書院、二〇一六年)が論じる。

(9) 『洒落本大成』二巻(同、一九七八年)中野三敏解説。

(10) 『洒落本大成』一巻(同、一九七八年)にこれも中野氏によって諸本関係を含む詳しい解説がある。

(11) 片桐洋一「仁勢物語の形態と成立」(『国語国文』四二巻六号、一九七三年)。

(12) 川上新一郎「古今和歌集版本考」(『斯道文庫論集』三四号、

二〇〇〇年）所掲。
(13) 『近世文学資料類従　狂歌2』（勉誠社、一九七七年）森川昭同書解題。
(14) 信多純一「にせ物語絵　『伊勢物語』近世的享受の一面」（『にせ物語絵』平凡社、一九九五年、初出一九七九年）。
(15) 芸能史研究会『日本庶民文化史料集成3　能』（三一書房、一九七八年）解説・翻刻。
(16) 『日本古典文学大辞典』二巻（岩波書店、一九八四年）「傾城請状」項長谷川強解説および中嶋隆「『けいせい請状』の方法」（『大谷女子大国文』一六号、一九八六年）。
(17) 『訓蒙図彙集成』九巻（大空社、一九九八年）。
(18) 『日本古典文学大事典』（明治書院、一九九八年）同書項（杉本好伸執筆）。石上阿希「訓蒙図彙と祐信春本・絵本」（『西川祐信を読む』立命館大学アート・リサーチセンター二〇一三年）は同書を春本の流れに位置づける。
(19) いずれも長友千代治編『重宝記資料集成』三六巻（臨川書店、二〇〇七年）所収。
(20) 中野三敏『江戸名物評判記案内』（岩波書店、一九八五年）、同『江戸名物評判記集成』（同、一九八七年）。
(21) 福田安典『医学書のなかの「文学」』（注8）。
(22) 浜田啓介「滑稽本としての劇書」（『近世小説　営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年、初出一九八九年）。
(23) 台帳を読む会編『馬琴の戯子名所図会をよむ』（和泉書院、二〇〇一年）による注釈が備わる。
(24) 元になった朋誠堂喜三二『羽勘三台図絵』とともに、国立劇場芸能調査室編『歌舞伎の文献3・4』として影印・翻刻（一九六九・七一年）。
(25) 天理図書館編『近世文学未刊本叢書　狂詩狂文編』（養徳社、一九四九年）に影印。
(26) 揖斐高「寝惚先生の誕生」（『江戸詩歌論』汲古書院、一九九八年、初出一九八七年）、同校注・新日本古典文学大系84『寝惚先生文集』（岩波書店、一九九三年）解説。
(27) 浅川征一郎編『未翻刻狂詩十一種』（近世風俗研究会、一九七〇年）複製・解題。
(28) 前二者は『近世文学未刊本叢書　狂詩狂文編』（注25）に影印・解題、後者は浅川征一郎編『未翻刻狂詩九種』（近世風俗研究会、一九七一年）に複製・解題。
(29) 『改訂増補版　通詩選三部作』（太平書屋、二〇一〇年）日野龍夫・鈴木俊幸解説。初版は一九八二年。
(30) 国文学研究資料館編『図説「見立」と「やつし」』（八木書店、二〇〇八年）『初衣抄』延広真治解説。
(31) 青本の戯作化という卓抜な表現は、鈴木俊幸『江戸の本づくし』（平凡社、二〇一一年）による。
(32) アンドリュー・ガーストル『江戸をんなの春画本』（平凡社、二〇一一年）が総合的に紹介。影印・翻刻に『女大楽宝開』（太平書屋、一九九八年）、『婚礼秘事袋』（同、二〇〇九年）、『近世艶本資料集成Ⅳ・Ⅴ女令川おしへ文　艶道日夜女宝記』（国際日本文化研究センター、二〇〇七・二〇一〇年）。
(33) 太平書屋版（一九九八年）影印解説は宝暦年間刊とするが、後年の同『婚礼秘事袋』太平主人解説の訂正にしたがう。
(34) 目録・データベース類未載。メトロポリタン美術館蔵。
(35) 浅野秀剛「春画のエクリチュール」ロバート・キャンベル

編『読むことの力』（講談社、二〇〇四年）、石上阿希『へんてこな春画』（青玄舎、二〇一六年）、国際日本文化研究センターの艶本資料データベースに全冊の画像掲載。

（36）林美一「『房事選』について」「『房事選』解読」「『同』補遺」（『会本研究』五・八・九号、一九七九-八一年）。

（37）大村沙華翻刻・注解（吉田精一編『国文学解釈と鑑賞3月臨時増刊号　新編秘められた文学』、一九八三年）。

（38）なお小島康敬「「性」と「聖」とをつなぐ笑い―パロディと日本文化―」（ツベタナ・クリステワ編『パロディと繚乱の江戸文化』笠間書院、二〇一四年）も問題意識が重なるが「パロディ」を内容・主題・構成など区別せずに概観し、書型・版面の模擬にはとりたてて言及していない。

（39）岩田秀行「「見立絵」に関する疑問」（注3）、同「見立て追考」（『国語と国文学』九〇巻四号、二〇一三年）、Timothy T. CLARK, “Mitate-e: Some Thoughts, and a Summary of Recent Writings”, *Impressions*, 19, 1997′『図説「見立」と「やつし」』（注30）掲載の諸論考など。

（40）大久保尚子「山東京伝作『小紋裁』『小紋雅話』『小紋新法』の検討」（『江戸の服飾意匠』中央公論美術出版、二〇一五年）。

（41）延広真治「小紋裁後編　小紋新法―影印と注釈（一）～（九）」（『江戸文学』二～一二号　一九九〇～九四年）。

（42）福田安典『平賀源内の研究　大坂篇』Ⅲ-一章「『本草妓要』論」（ぺりかん社、二〇一三年、初出一九九〇年）。本作の改作、諸本については宮本祐規子『時代物浮世草子論　江島奇蹟とその周縁』三章二節「其磧と初期洒落本」（笠間書院、二〇一六年、初出二〇一二年）参照。

（43）『江戸見立本の研究』（注7）所収解題。

（44）岩田「機知の文学」指摘（注2）。

（45）アダム・カバット『江戸化物の研究』（岩波書店、二〇一七年）一章が論じる。

（46）浜田啓介「滑稽本としての劇書」（注22）。

（47）吉原細見を模擬したもの三点を拙編書『絵入吉原狂歌本三種』太平文庫49（太平書屋、二〇〇二年）に収めた。

付記　本稿の執筆にあたりご助言を賜りました岩田秀行氏、石上阿希氏、浜田泰彦氏に深謝いたします。本稿で言及した作品の一部は来年二月刊行予定の拙著（集英社インターナショナル新書）と重複することをお断りしておきます。